

ブラジル紀行 —基礎共同体の民衆と解放の神学—

大倉 一郎

1. はじめに—ベリマンの描いた基礎共同体

1989年に日本語で『解放の神学とラテンアメリカ』¹⁾という本が刊行されて話題となった。著者フィリップ・ベリマンは米国人で、1965年から1973年までの8年間にわたり中米パナマ市の貧民街に入り、そこでローマ・カトリック司祭として働いた人物である。パナマを含む中南米のこの時代は解放の神学運動（後述）が中南米諸国を被う巨大な社会現象として高まりを見せていた時期であった。カトリック教会の総本山ヴァチカン当局はこの運動に中南米における自らの未来を左右しかねない可能性を察知して警戒的になり、アメリカ合州国はこの地域における社会主義勢力の浸透と自らの影響力を損なわれかねないという危機感から妨害工作を画策したほどであった。ベリマンが働いていた当時のパナマでも、レオ・マオンなどの解放の神学者が活躍していた。つまり、ベリマンは、単に書齋の仕事というより実体験を重ねた参与観察的ともいべきフィールドワークに裏付けられて、先の著書を書き上げたのである。たしかにこの著作には直接の目撃証言が盛り込まれ臨場感あふれるリアルな説得力が感じられる。とりわけ、そのような記述の一つが「基礎共同体」についての考察であろう。

さて、多くの読者には馴染みがないことを知りながら、何の説明もなく用いてきた標題中の二つの言葉について、ここで説明しなくてはならないだろう。それは「基礎共同体 (comunidades eclesiais de base)」と「解放の神学 (teologia de libertacao)」という言葉である〔筆者注：()内はポルトガル語標記〕。

先ず、「基礎共同体」とは、今日、南米のカトリック教会に広く見られる民衆の組織体のことである。ベリマンによれば、「<基礎 (base)>という言葉はふつう、社会の<底辺>すなわちプアー・マジョリティを意味するものと解釈されている」²⁾という。つまり、民衆と言っても、とくに都市スラムの貧しい民衆や農村部の貧困層が構成する組織体である。一般的にはミドルクラス以上のカトリック教徒がこのタイプの組織に加わることはない。それらの階層は伝統的な大聖堂や教会に通うからである。さらにベリマンによれば、基礎共同体の成立は1950年代に遡るという。そこには西欧諸国での労働者階級への働きかけを参考にした司祭たちの民衆組織化の活動などが影響していたという。さらに専門家や実業家などの階層を担い手とした教会復興運動なども先駆的な役割を果たしたという。もっとも、後者の運動には民衆は早々に懐疑的になって行ったという。

しかし、以上の説明も全てではなく、ベリマンの結論は「基礎共同体の出発点が何であるかを正確にいうのは不可能である。ひとつだけはっきりしていることは、その基礎をつ

くったのはさまざまな場所で行われた司牧〔筆者注：信者に対する司祭の宗教的指導を意味するカトリック教会用語〕の経験だということである³⁾ということになる。ベリマンは司祭の視点から説明するので、司祭側のイニシアチブに意識が置かれるようであるが、そこには当初はきわめて受身だったとはいえ、司祭に応じて共同体組織を志向した民衆たちが存在していたことを見落としてはならないだろう。ともあれ、このようなベリマンの指摘も、日本では基礎共同体についての認識が概して神学者の著作としての解放の神学との関連で紹介されてきた経過があり、必ずしも十分に注意を払われてこなかったようである。そのような事情を考えるにつけ、重ねて強調したいのは、後の解放の神学の登場に先立って共同体形成への志向を秘めた民衆そのものが、中南米社会の周縁部に広範に存在していたというその歴史的事実を看過してはならないということである。

次に「解放の神学」についてふれておく。それは、狭義には1950年代以降70年代に至る中南米において、カトリック教会及びオーソドックス・プロテスタント教会内部から展開された社会改革的・民衆文化的キリスト教運動と、そこから生まれた神学思想の総称である。自らこの運動の担い手の一人でもあったペルーの神学者グスタボ・グティエレスは、1967年にペルーのチンボテの講座で彼らの実践と思索から生まれた主張に「解放の神学」の名称を与えた。4年後の彼の主著『解放の神学』の刊行とともに、この名称は世界に知られたのである。他方、ほぼ同時代に南アフリカの反アパルトヘイト闘争や北米の黒人キリスト教徒の解放運動から生まれた神学思想も広く解放の神学と呼ばれている。

ただし、本稿では中南米の文脈の意味で解放の神学を用いている。ところで、この意味での解放の神学は、現在の日本では、すでに衰退してしまったかのように印象づけられているのではないだろうか。たしかに1980~90年代を通じて様々な反動の動きが包囲を強めてきたことは事実である。その時代に起こった社会主義陣営の崩壊や北米起源のエヴァンジェリカル諸教会の台頭⁴⁾、さらに2005年、解放の神学者に終始圧力をかけてきた枢機卿ヨゼフ・ラッツィンガーの教皇ベネディクト十六世としての就任によるヴァチカンの保守派支配によって、解放の神学派の苦境は窮まったかに見えた。実際、基礎共同体数の減少も報告されている。

しかし、2006年の今日、解放の神学は新たな相貌を見せて中南米社会でまたたかに展開していることも事実である。それはいったいどのような根拠で言えるのか。今回訪れたブラジルにおいては「聖書学習運動」と「センターハ運動」（いずれも後述する）がその新たな展開としてあげられるであろう。それらの基盤にはいまま基礎共同体が存在している。主としてこの点を報告するつもりである。なおこの報告にあたって、十分な資料や統計的データなどを入手しえていないわけではないので、断片的・印象記的エッセイにならざるをえない。また、今回のブラジルの旅はちょうど三週間であった。日本の25倍の広大な大地と社会と人々の生活を巡るには、文字通りピンポイントの見聞に過ぎないともいえる。これら多くの限界をもった上で、本稿は基礎共同体への関心を根底にそれを含めて解放の神学の現在の一断面をブラジル紀行として報告する試みである。

ところで、ブラジルでの滞在の記憶を呼び戻そうとすると、わたしの記憶は感情に結びつき、頭の中に条件反射のごとく訪問中耳にしたブラジルのリズムが響いてくる。それとともに思い起こす記憶は、どうもかなり開放的な気分を宿して現れてくる。ともすれば、そうした気分へ傾いて語り口もそれに応じてくだけそうな予感がしている。以下、わたしの語調や話題の展開が変調をきたす時は、頭の中にブラジルの風でも吹いているなど、寛容の心で受け止めていただけるならば幸いである。

2. フィールドワークのあらまし

2005年8月3日夕刻に三里塚・成田空港からブラジルに飛び立った。この度の行路にはブラジルの任地に戻る友人で、わたしを招待し受け入れ先となってくださった小井沼国光宣教師とその三男広嗣氏が先導してくださった。おかげで、ニューヨークで裸足にされての通過検査はあったが、行路はまずまず快適でとくに不安を感じないで済んだ。サンパウロ・グアルーリョス空港に現地時間8月4日に到着、同月25日の離陸まで三週間のブラジル滞在が始まった。

まずフィールドワークの概要をほぼ時間軸にそって記すと次のようになる。サンパウロ市の日系サンパウロ福音教会、神言修道会聖書学習センター（「聖書学習講座」）、ポーボ・ド・ルア・メソジスト共同体の訪問。オザスコ市のアゴスティーニョ修道会カトリック教会の訪問。パラナ州サン・ジェロニモ・ダ・セーラのフマニタス診療所及び周辺の農村共同体と農業学校の訪問。パラíba州ジョアン・ペソアのエエズス会神学校及びカトリック教会とファベラ⁵⁾の基礎共同体の訪問。ペルナンブコ州レシフェのエキュメニカル・キリスト教団体「ディアコニア」、アルト・ダ・ボンダージ・メソジスト教会と周辺のファベラ、ドン・ヘルデル・カマーラ研究所、ジルベルト・フレイレ記念館の訪問。バイア州サルバドールの奴隷制関連史跡、とくにボンフィン教会の訪問。

以上の各所で基礎共同体、教会、神学校などでの礼拝や集会に数多く参加し、それらの共同体のリーダーや青年たち、司祭、神学者、神学生などとの対話やインタビューの機会を得た。さらにブラジル人の家庭を訪問あるいは宿泊して食卓をともにすることができた。くわえて、幾つかの訪問地で解放の神学ではレオナルド・ボフ、教育学ではパウロ・フレイレの近年刊行のポルトガル語原書を両者合わせて二十冊余り収集できた（それらの大半は日本では未刊、また英訳もわたしのインターネット検索の限りでは、数少ないようである）。その他、まったく幸運にも解放の神学の先駆者の一人ドン・ヘルデル・カマーラに関する未公開という写真資料を収集できた。

ここでわき道にそれる話題とは思いますが、オープニングの一体験に触れておきたい。ブラジル最初のわたしの活動は、8月7日、小井沼宣教師の働く日系人プロテスタント教会であるサンパウロ福音教会の日曜礼拝での説教担当であった。礼拝後、出席者の方々とお話しする機会を得た。日本への出稼ぎを体験した方、現在も日本との間を行き来しているという方もいた。期せずして在日日系ブラジル人の本国での生活体験と感情を身近に聴く機会

となったのである。そこで新たに気づかされたことを今後の多文化共生ゼミの研究や指導に反映させたいと思った次第である。それらの詳細はここには記さないが、移民として数十年を生きてきた姉妹のストーリーは、一人ひとり印象深くわたしの心に残っている。なかでも十九才で北海道を離れ、ブラジルの地で七十年を越える人生を生きてこられた樋口ミキさんと、わたしのお国言葉の「函館弁コ」交じりでお話しできたのは感激だった。この日までは日本語の世界だったのだが・・。その翌日からわたしの環境は大きく変わった。

3. 聖書学習運動 - 歌声とダンスの解放の教室、解放の学び、解放のソーラン節

わたしは24時間ポルトガル語の世界に放り込まれた。サンパウロの聖書学習センター(神言会)主催の聖書学習講座がその場であった。この講座によって身をもってブラジルで実践されている「聖書学習運動」のリアリティを体験する意図であったが、初めての全てポルトガル語の環境にかなり面食らったのも事実だ。けれども、細部にわたる言葉の意味は分からなくても、ポルトガル語がまるでラテン音楽の歌を聴くように楽しめたので、とくに苦にはならなかった。また、英語を解する人は限られていた。否応なしにかなりの強心臓と僅かのポルトガル語を駆使してブラジル人メンバーとコミュニケーションしなければ食事何事もままならず、その荒療治のおかげでメンバーの中に入り込むことができた。結果からいえばこの試みは上々の結果であった。

さて、「聖書学習運動」に関して若干触れておく。ブラジルに限らず中南米の解放の神学の運動では聖書を学ぶことが重視されている。どこでも、基礎共同体から聖書学者のネットワークまで熱心に聖書を学ぶ。基礎共同体ならば、中米ニカラグア・ソレンチナーメの農民共同体の福音書の学びが代表的である。⁶⁾ 聖書学者ならば <Revista de Interpretacao Biblia Latino-America (『定期刊行ラテンアメリカ聖書釈義』、略称LIBLA)> が活発な研究活動を続けている。その成果は、学者仲間だけに留められず基礎共同体をエンパワーするために働く人々によって学ばれ、さらに基礎共同体のメンバーたちが、貧しい者の視点から聖書を学ぶことに役立つように用いられるのである。ブラジルでは、1983年にカルロス・メステレス神父を中心にプロテスタントの聖書学者も協働して <CEBI> という聖書学習運動が展開された。わたしが今回参加した神言会聖書学習センターの聖書学習運動は、1987年にCEBIの姿勢を継承しながらスタートしたプログラムであった。

このプログラムは旧約聖書と新約聖書を隔年で学んでいく。今期の講座は旧約聖書の学びであった。全6巻の旧約聖書学習のテキストが聖書学習運動を支持する学者たちの手で作成されていて、わたしのクラスでは「出エジプト記」とそれに続くモーセ五書を手がかりに古代イスラエル十二部族の歴史的姿と形成史を批判的聖書学の手法を用いながら説明していく学習が行われていた。聖書テキストが編集の手を加えられた歴史的文献であることを示す。古代オリエントの権力支配に抗して多様な被抑圧民が連帯して解放的共同体を形成していく過程が強調される。それをブラジル史における先住民や黒人奴隷の抵抗の

歴史、さらに受講生たちの現在の社会的な実践体験と関連づける。むしろ、それらの闘いの歴史を積極的に意味づける方向で意識化していくのである。

実のところ、わたしは参加するわずか三ヶ月程前からポルトガル語のレッスンを受け始めたばかりだった。最初は辞書を片手に緊張して授業に臨んだのだが、前月までである大学の授業で旧約聖書を論じていたことが思わぬ助けになり、講師の基本的視点や講義の流れは総じて理解できるところであった。とくに信徒神学者のルイス・ディートリッヒ先生や、パンチの利いたユーモア一杯のシゲ神父の講義には、皆を笑わせる話ぶりの中にラディカルな批判精神と蓄積された学問的力量を節々に感じることができた。しかも授業は一方通行ではなく、学生との活気あふれる対話のなかで進められていた。

学生たちは、ほとんどすべて社会人で、職業も年齢も地域も経験も様々だった。会社を定年退職後に教会活動に奉仕をしている高年齢の女性・男性、現役の社会人として働きながら休暇を利用して参加している女性・男性、社会学を教えている大学教員、かつてアフリカのモザンビークで奉仕していたというシスター、日本で生活した経験もあり今は日系老人ホームで働いているシスター、カトリックの社会・文化団体で働く若手のシスターや信徒の女性たち、大都市の基礎共同体で司牧にあたっている神父たち、長年農村教会で司牧してきた神父たち、それに神学生たちもいる。こうしてあげてみると、必ずしも最も貧しい民衆ではない人々ともいえるが、貧しい人々との共感と連帯の中にキリスト教信仰の生き方の真実を認め、また行動しようとしているということであろう⁷⁾。

これらの人々がブラジル各地から参加している。アマゾン川上流のロンドーニャ州から来た人、首都ブラジリアから来た人、当地サンパウロの人、アルゼンチン国境に近い南の地方からの参加者、隣国ベネズエラやペルーやアルゼンチンからの参加者、さらに今はブラジルで働いているが、出身は遠く東チモール、インドネシアのフローレス諸島、南インドから宣教師としてやってきたという神父たち等、実に多彩な民族的・文化的な背景を持つ人々であった。日本からの人物もいた。わたしのことではなく、講師の一人、シゲ神父こと、中ノ瀬重之神父のことである。シゲ神父は九州五島列島の隠れキリシタンの末裔だという。26才で日本からブラジルに渡航し、さらに米国ニューヨークに渡り、古代イスラエル研究の泰斗ノーマン・ゴットワルトのもとで神学博士論文を書き上げ、再びブラジルに戻った。その後、現在に至るまで、文字通り第一線の解放の神学者としてブラジル中の基礎共同体を東奔西走して活動している。キリシタンにつながる日本出身のシゲ神父によって、解放の神学の息吹がさらに身近なものに感じられたことであった。

このような多彩な人々のための講座の準備には講師陣のやる気と努力も人一倍必要なのだろう。講座を開く前に講師陣がブラジル各地から集まって、共同の研鑽を毎年一週間もの合宿として行うという。またシゲ神父のお話では、ユーモアと活気あふれる対話的授業は、周到的な準備とともにブラジルの民衆的教育学者パウロ・フレイレの被抑圧者の教育学の考えを導入して、それをつぶさに実践しているからだという。しかし、その実際の趣は日本ではおよそ想像しにくいことであろう。授業は、ほとんどの場合、最初の5分間く

らいは、楽器の得意な学生の演奏するブラジル民衆音楽と、それに乗って気の向いた学生たちが踊るダンスから始まった（僧服のシスターもペアを組んでわたしと踊っていた!）。シゲ神父などは講義の前に自らアタバケという太鼓をたたき一踊りしていた。こうして教室は始めから心身の解放感が溢れることになる。



聖書学習運動の教室風景
ダンスと歌から始まる。右端はシゲ神父

ブラジルの教育学者モアシール・ガドウツェィによればパウロ・フレイレ自身もいつもラテン音楽をBGMに著作に励んでいたはずである。フレイレ的な解放のペダゴジーは、我々の心身丸ごとの解放的振る舞いを含んでいるようである。こうして解放の神学の教室は教師と生徒の学習関係そのものが解放を志向していたといえる。このようにして笑いと知的目覚めに溢れて心身の解放のエネルギーを養った人々は、各地の基礎共同体をはじめ様々な活動の場に貧しい人々との連帯をめざして押し出されていくのである。

踊るという話題に及んだので、わたし自身が踊ってしまった体験にも触れておきたい。この聖書講座では、しっかり学んだ週末には講師も生徒も夕食を共にしてフェスタ（パーティー）を楽しむ。わたしはそこでソーラン節を踊ることにした。わたしのソーラン節は幼い日の子守歌である。父方の祖母は北海道函館の下町で民間神道の女性指導者だった。祖母の教会にはたくさんの漁民や町の庶民が集まっていた（今にして思えば、民衆神道版の基礎共同体と言えなくもない）。礼拝祭事が終わると教会の人々は車座になって歌や踊りを楽しんだものである。ソーラン節はみんなが大好きだった。わたしはいつもそんな大人たちの膝の上でそれを見て聴いていた。四十年以上も前のその記憶を思い出しながら、自分の工夫も加えて歌い踊ってみたというわけである。ブラジルのキリスト者たちは喝采して楽しんでくれた。わたしもおなかの底から声が出て手足が舞った。汗と一緒に何という解放感。

4. 基礎共同体 - 食卓をともにする者は幸い

a. 農村の共同体

この旅の後半は、農村の共同体を訪問することから始まった。パラナ州サン・ジェロニモ・ダ・セーラに佐々木治夫神父を訪ねたのである。佐々木神父の活動を見ることは、農村における多面性に富んだ共同体の一つの姿を如実に知る機会となった。それらは、ベリマンを手がかりに理解していた基礎共同体のイメージとは（本稿第1節を参照）、必ずしも同一ではなかった。しかし、実見によって、わたしはそれが解放の神学の具体的実践を表現した共同体づくりであることは明らかではないかと考えた。この点から佐々木神父が携わる農村共同体の形成を、解放の神学が理解している農村の基礎共同体の発展の文脈に置いてイメージすることは妥当だと見るのである。歴史的实践のレベルにおける解放の神学は、着実に力強く民衆の世界に生きていくというべきではないだろうか。

佐々木治夫神父は浜松の出身でブラジルに来て48年になる。先ず佐々木神父が創設者となった「フマニタス慈善協会」を訪れた。28年前に創立され、今日まで、その診療所はハンセン病治療においてブラジルでは先駆的かつ優れた医療活動を行ってきた。現在もブラジルにおけるハンセン病治療と研修の人々の信頼厚いセンターとして国内各地から患者たちが治療に訪れ、海外からも専門医や医学生が研修に訪れる。この診療所の働きは、かつてNHK教育テレビの特集番組に取り上げられ日本にも紹介されている。その取材のインタビューに答えて、佐々木神父は、フマニタス設立の志はハンセン病に独り苦しんでいたペトロさんという貧しい青年との出会いから始まっている。彼を通して山間に隠れ住む多くの患者たちの存在を知った。さらに、病気に苦しむ貧しい人々に出会い癒しの活動に力を注いだイエスにキリスト教の福音とそれを生きる姿を見ている、という趣旨のコメントをしておられたと思う。解放の神学者は、キリスト教の霊性(スピリチュアリティ)に「イエスに従うこと (seguir a Jesus)」という簡潔な定義を与えている。それはフマニタス診療所を築いてきた佐々木神父のものでもあったのではないだろうか。

しかし佐々木神父の共同体形成の働きはさらに広範で多面的である。地域の貧しい住民の相談者、老人ホームの長、先住民の共同体の協力者でもある。さらに注目したいのは、センターハ運動における共同体作りの力強い支援活動である。佐々木神父からうかがった同地におけるセンターハ運動について触れておく。まずセンターハ運動とは、公式名で *Movimento dos Trabalhadores Rurais Sem Terra*（「土地なき農業労働者の運動」, 以下MST）である。ブラジルでは、総じて大所有地（Fazenda）を抱え込む限られた富裕な地主層と、土地はおろか農具や技能さえ持たない貧しい農業労働者層の格差が甚だしかった。しかし貧しい人々の傍らで無為に放置されているファゼンダも多かった。

ブラジル連邦政府は1985年憲法で、それらファゼンダを対象に農地改革の試みに着手した。放置された土地に土地なし農業労働者が住み込んだ場合、調査の上で政府はその土地を買い上げて、住み込んだ人々に土地を分配するのである。MSTはこの改革制度を実効あるものにして自営農民となるべく立ち上がった農業労働者の組織である。実際の運動

は困難な闘いだという。地主、地主に買収された警察、農業労働者の闘いを隠れ蓑にセンターハを名乗りながら利益だけを得ようとする団体、それらの妨害との闘いであるという。その中で MST は本当に農業をめざす労働者を組織している。この地でもセンターハ運動が貧しい民衆によって期待されたのである。

佐々木神父は、その MST の運動を深く理解し、自らフマニタスの土地の一部さえ入植地に提供して支援を続けている。しかし入植は武装した地主の用心棒による妨害を受けた事例もあった。今回、わたしは、実際にその危機を跳ね返して入植して 8 年目の共同体の農家を訪問したが、老夫婦、若いカップル、その子どもたちなど、三世代 6 人という家族が力を合わせて働いていた。この家族にも見られるように次代の子どもたち―「センターハの子ども」と呼ばれている―が育ちつつある。親たちは厳しい闘いを潜って入植を果たした。しかし、他方で入植地を維持できない人々もいる。農民としての確かな技能の育成が急務となった。そこで佐々木神父はセンターハの農民たちと、次代の子どもたちの通う農業中学校を創立した。寄宿制をとり、学生は一週間学校で学び、次の一週間は帰宅して学校で学んだ農業技術を用いて家の農作業を助けるのである。

訪問時、校長として指導にあたっていたエリオ・フェレイラ・コウト氏の話を紹介しておく。彼は元カトリック神学生で、週日は校長兼寮監として働き、週末は教育学修士の論文を書き続けているという 26 才の青年であった。カトリック司祭にはならないが、現在の職は自分にとっては解放の神学の実践だという。クラスのネーミングがその姿勢を象徴しているように見えた。たとえば、それはパウロ・フレイレ組、チェ・ゲバラ組であった。これらの子どもたちが良き農民に育ち地域を再建し、農村文化を築いてくれる人材になってくれることが彼の希望だった。彼によれば、センターハ運動とその連帯者には、彼のような神学教育を受けた体験者が珍しくはないとのことであった。



センターハの農民家族と共に
祖父母、息子夫婦、孫の三世代で働き暮らす。老夫婦の間に筆者と佐々木神父

ところで、わたしにはもう一つの関心があった。それは佐々木神父が、以上に見てきたような実践の中でブラジル解放の神学の指導者の一人カルロス・メステルス神父やブラジル・カトリック司教会議の聖書学習テキストを日本に紹介するべく翻訳に努めてこられた一学習者でもあるということであった。先ず実に様々なことが起こってくる現場に携わる実践者でありつつ、しかも学的研鑽にも誠実であることは、気力も体力も、それにもまして粘り強い情熱と確信のいることだ。しかし、そういう神父の知の形成のスタイルは、神学知を「実践の批判的考察」⁹⁾と位置づけ、「それは愛の後に従うものであり、けっして先頭を切って歩むものではない」¹⁰⁾と見做す解放の神学の具体的なあり方を端的に示してくれるものであったと思う。そのことを心において佐々木神父の研究の苦労や新たな発見の喜びを伺うことができた。その二日間に渡る夕の食卓とその後の缶ビールの一時は、わたしにとって、まさに至福の時間だった。

b. 都市の基礎共同体

佐々木神父を訪れた後、休む暇もなくノルデステ（北東部）の旅が続いた。ノルデステはブラジルで最も貧困の問題を抱えた地域である。ここに友人のネットワークを持っておられる小井沼真樹子牧師と共に、日系二世で神学生でもあるローザさんが同行してくれた。彼女のポ・日両語の実力とブラジル人としての勘と知恵に幾度も支えられる旅になった。ノルデステ最初の訪問地パライーバ州の州都ジョアン・ペソアではイエズス会予備神学校にお世話になった。そこに宿泊しながら神学生たちの案内で4箇所基礎共同体と一つの聖堂の礼拝や集会に参加してみた。それらの各所で行われたミサ〔筆者注：ローマ・カトリック教会で行うイエスの最後の晩餐に由来する礼拝儀式〕や集会を基礎共同体の人々と一緒に分かち合い、対話の機会を得ることができた。

わたしが訪問したのは、イエズス会が司牧にあたっているサグラド・コラソン・ジェズス教区であった。教区内の住民総人口は約4万人。教区内には13箇所の基礎共同体がある。規模の大きい共同体はサン・ジョゼ基礎共同体で約600人のメンバー、その基礎共同体を含めて100人を超えるのは4箇所、他の9箇所は100人以下の規模である。それぞれの基礎共同体に活動的な信徒リーダーがいて礼拝・集会などの運営をはじめ、地域の課題などに様々な役割を担っている。

たとえば、ノッサ・シニョーラ・ダ・グロリア基礎共同体を訪問した時には、日曜日の夕方7時過ぎの礼拝に参加した。狭い道幅の両側に土壁の小さな住居が密集して軒を連ねる街の一角に、テニスコート一面分といった広さの平屋の教会が立っていた。背もたれのない古びた木製のベンチが並び、正面に向かうと十字架とミサのための卓、その左脇に小さなマリア像、右脇に礼拝の司会者と伴奏者の席があった。すべてが質素だった。この夜の礼拝参加者は青年30人ほど、大人20人ほど、それに子どもたちが少数。圧倒的に女性が多い。聴覚障がいの人のために手話サービスがある。日ごろ経験する日本の教会の礼拝に比べると、参加者が身体をゆすりながら、とにかくたっぷり賛美歌を歌う礼拝であった。

礼拝に先立って共同体のリーダーや神学生に話を聴くことができた。この夜の礼拝はおもに青年を対象としたものであったので、いきおい話題は青年のことに集中した。この地域には若者が多い。近年はブラジルでも高い学歴が求められる。若者たちが自分の将来を夢見れば、当然、大学進学を夢見る。そして、貧しい家計の事情からすると、国立大学をめざす以外には難しい。しかし、合格のための壁はきわめて高く、実際、進学できる者はごく稀である。いきおい貧しい青年たちはほとんどが進学はもとより、自分の将来のことなどあきらめることになる。リーダーや神学生たちが、そういう青年たちの話を聴いて一緒に考えたり、励ましたり、色々な相談に応じているという。

この基礎共同体に限らず訪れたいずれの共同体でも、案内に立った神学生や修道士は、地域のリーダーとともに独り暮らしの老人や病人を抱えた住民に声をかけ、時には家庭を訪ねて、安否を問い、祈りをともにしていた。基礎共同体では人々の生活の日常的問題がきめ細かく聴かれ、理解や感情の分かち合いが保たれているようである。そこに基礎共同体の活動を支えるもっとも基本的な営みがあるのではないだろうか。教区秘書セベリーナさんによれば、共同体13箇所では2年前には1500人前後のメンバーを数えたが、現在はしだいに増えてきているという（実数は不明）。

再び食べること的话题になってしまうが、ある基礎共同体を訪れて忘れがたい食卓に与った。それはマンガカルー地区というファベラで訪れたポルト・ド・トータ基礎共同体でのことだった。そこでは小井沼真樹子牧師の友人で共同体の信徒リーダーであるマリア・ガレーガさんが、わたしたちを迎えてくださった。マリア・ガレーガさんは真樹子牧



ジョアン・ペソーアのハッサ・シニョーラ・ダ・グロリア基礎共同体のメンバーたちと
右端は通訳をしてくださった日系2世のローサさん

師の顔を見るなり、「マキーコ」と声を弾ませ目を潤ませてしっかりと彼女の首を抱きしめた。温かい友情の心が傍らのわたしにもひしひしと伝わってきた。

そして温められたのは心だけではなかった。わたしたちはマリア・ガレーガさんの心づくしのノルデステ風郷土料理で温かな食卓を囲むことができた。見掛けによらず鉄の胃袋をもつわたしは微塵の遠慮もなく遠いアフリカのルーツを想わせるお料理の数々に舌鼓を打った。そんなわたしに真樹子牧師が、マリアさんたちは、自分自身は一年に一度というようなご馳走をわたしたちのために用意してくださったようだと教えてくれたのである。わたしのおなかはかなりきつくなりかけていたが、いっぺんに心まで一杯の思いに満たされてしまった。このように歓待されていることに感謝を覚えたわけだが、同時に貧しい町につつましく生きる人々の食卓で、ここぞとばかり人一倍食べていた自分がなんとも恥ずかしくなっていた。

そして、再々、食卓の話になってしまう。どうもわたしの記憶は感情と共に舌と胃袋にも固く結びついているようである。イエズス会の神学校ではゲストルームの個室に三泊したが、そのおかげでほぼ朝夕、つまり食事の度ごとに一人で神学生やロベルト神父とテーブルを囲んだ。わたしはすっかりフェイジョアード（肉入り豆スープといった一品）が病み付きになってしまった。どのお料理もみな美味しくいただいて感謝であったが、神学生の英語の練習台にわたしは丁度よかつたらしく、回らない舌、すぐ出てこない英語に冷や汗をかきながら、彼らとの食卓談義と相成った。神学生たちは、基礎共同体での体験、そこから感じとっているショック、共感、そしてためらいや無力感、しかし、チャレンジや責任の自覚などを率直に話してくれた。また、教師はブラジル社会と教会の課題や困難、神学教育のあり方や喜び、解放の神学の未来への期待などを語ってくれた。この食卓談義の三日間最後の朝食後、共に語り合った体験、基礎共同体の貧しい人々を訪ねた体験に触れて、お別れの挨拶をすることになった。わたしは次のようなことを話した。

わたしは長く解放の神学を学んできた。しかし、みなさんと幾つかの共同体の人々を訪ねて痛感したことが二つある。まず、神学の知識がどれほど増しても、わたしの感性が貧しい隣人に対して如何に鈍いものになっていたかという反省-わたしはマリア・ガレーガさんの食卓の自分を思い出していた-だった。そのことに胸を突かれ、あらためて想像力をめぐらせ、人々が語る言葉に耳を澄まして聴ける者になりたいと思った。もうひとつは、そのように祈る気持ちで再び幾つかの共同体に出かけたとき、わたしに出合っ言葉をお交わしてくれた人に、抱きしめ合っ挨拶をお交わした人に、黙っ微笑んでくれた人に、その人の存在の重さを、その表情の向こうに秘められた尊厳を、あらためて感じさせられたことだった。これらのことはわたしにとって、ブラジルでも日本に帰っても変わらない大切なことだと思っ。わたしは自分をつくづく小さく弱い人間だと思っ。それでも生かさされて働く所で貧しい隣人との出会いに努め、どんなに小さくても自分の担える同行を粘り強く続けていく者でありたい。わたしたちはそれぞれの身を置くところでそうでありたい。

学生たちは拍手で応じてくれた。わたしが、食後の皿洗いをしていると、自分はノルデ

ステの田舎の貧しい出身でまだ英語を十分に話せないのと、食卓ではほとんど聞き役で座っていた一年生の学生が、一言だけ「アイ・ライク・リベレイション・セオロジー」と話かけてくれた。わたしは、「たいへんだろうけど、他の人の痛みを分かろうとする、そんな神父さんになってほしい。きみのためにお祈りしています」と答えて別れた。

5. 基礎共同体に見た民衆と解放の神学 - 貧しい人々の賛美とアブラッソ (抱擁)

ここで解放の神学というテーマそのものに関して心に残ったことに触れておきたい。先ず短く報告できることから言うと、渡航前からわたしの長年の関心だったレオナルド・ボフのことである。ボフの解放の神学のための入門的著書を始めて日本語に翻訳したとき、リオデジャネイロからのボフのファックスを受け取ったことがある。彼は翻訳書出版許可の条件として、翻訳者が受け取る予定の稿料をすべて彼に譲って欲しいと要請してきた。その稿料はそのまま彼が関わっているリオデジャネイロのストリート・チルドレン救援活動にささげたいという。そのことにいたく感心して翻訳の意欲が増したものである。どうしても直接に会ってみたい神学者であった。しかし、今回は事前の交渉をしていなかったことやスケジュールの都合などから面会することはできなかった。それでも、いまでも健在であると聞き、ルイス・ディートリッヒ先生のご配慮で、いずれ面会できる可能性も確認できた。

ボフの近年の旺盛な著作活動も知ることができた。その情報については、『研究ノート：レオナルド・ボフの神学・その霊性論をめぐって』という短い報告を『基督教論集 第49号』（青山学院大学同窓会基督教学会）に寄稿したので、関心のある方はご覧くださいらばと思う。今回ブラジルで収集したボフの近刊を読み始めているが、一言だけ付言しておけば、ボフの神学的思想は、解放の神学を離れたというよりも、それをエコロジカルな視点やインターフェイスな姿勢と対話しながら宇宙的解放を志向する独自の共生的思想に深められつつあるのではないかというのが、わたしの現在の推論である。

次に触れたいのは、人々と直接に出会うフィールドワークだからこそ発見できた、わたしにとってかけがえのない貴重な体験である。渡航前のことだったが、真樹子牧師が訪問先等について何か特別なリクエストはありませんかと私に尋ねてくださった。わたしは主な希望の一つとして、できるだけ基礎共同体の人々と一緒に礼拝や集会に参加して、じっくり対話する機会を設けてくださいとお願いしていた。その願いは期待以上になえられた。滞在中の礼拝出席は10回を超えていた。とくにノルデステでは、基礎共同体のミサやその後続く集会を梯子して歩いたともいえる状態だった。また、各地で何人かの人と時間をいただいて対話できた。

そこで心に残ったことは多々あるが、もっとも心に深く残ったのは、基礎共同体のミサの祭儀の中で歌われる「賛美」であり、「平和の挨拶」として交わされる「アブラッソ (抱擁)」であった。だれもがおなかの底から賛美を歌っていた。ただ喉で歌うのではなく手も足も腰も身体中で歌っていた。ブラジル民衆の耳に親しい軽快なリズムとメロディーの美しい

気取らない曲でもあるから、だれもが自然体で歌えるのだろう。実はそれらの賛美のCDを日本に持ち帰ったので、いまも自分の部屋で人々の賛美を聴いている。黙って聴いてなどいられないときもある。実際、基礎共同体のミサで耳にした〈Deus chama a gente pra' um momento novo… (神は新しいときをめぐして民を呼び出す…)〉と歌う曲など、いつの間にか立ち上がりステップを踏んで踊ってしまう。わたしの宗教的心情を臆面もなくそのまま言えば、素朴な賛美がわたしの身体をいのちの創造者への賛美そのものにしてしまうような気がする。わたしは丸ごとの自分が創造者を賛美する存在として造られているのだと、あらためて嬉しくなってくる。

そこであらためて、ブラジルでミサとともに与った人々の心を想像してしまうのである。ミサに共に与かっているとき、人々が隣人たちと互いの手をつなぎ、肩を抱き合ってアブラッソしていたのはなぜだろうか。それがブラジル人の開放的な文化的伝統だという言い方もあるだろう。しかし、宗教的感情の視点からいえば、それはお互いを創造者に生かされているかけがえのない自分であり、大切な隣人であると感じる感受性から生まれた喜びのストレートな表現だといえるだろう。今日の福音書研究によれば、イエスは当時のユダヤ権力に追われた逃亡の旅に暮らしながら「すこぶる愉快的」¹¹⁾ 喜びの人であったという見方ができるという。彼は創造者への賛美の感情を素朴なまでにいきいきと生きていたのである。そして、繰り返し、権力者はもとより宗教に熱心を自負した人々からもおよそ顧みられなかった人々、病気の人や貧しい人や民族を異にする人や女性たちと、当時のタブーを破り、食卓を分かち合い、肩を抱き合って抱擁した。それこそ、イエスの喜びと感謝のアブラッソだったのではないだろうか。

ブラジルの基礎共同体の民衆が与かっているあの喜びの賛美とアブラッソ、そしてそれを分かち合い生きている一人ひとりの身体が存在する限り、解放の神学はおおよそなくなるだろう。解放の神学とは、侮辱を受けながらも創造者の霊に満たされ生かされているあらゆる身体の言葉と振る舞いだからである。どんな権力のある人も、知恵のある人も、偉いと言われている人も、あの貧しい人々の賛美とアブラッソは決して奪えないであろう。

6. おわりに - 「わたしたち」という声

かつて、ベリマンは基礎共同体の形成が司祭たちの司牧の経験に負っていた点を指摘した。彼のその著作から19年後のわたしのフィールドワークを終わり、ふりかえりの最後に次のように記したいと思う。彼の指摘は過去のものではない。歳月の隔たり、パナマとブラジルの違いはあったとしても、いまもそれは多くの点で妥当するだろう。しかし、今日、わたしたちはひとつ新しい気づきを書き記すことができるのではないだろうか。それは、逆風の時代を経ても、解放を願う自分自身への自覚を深めてきた身体ごとと賛美するあの基礎共同体の民衆たちの存在である。グローバルな権力と制度的教会がプレッシャーを強め続けている現在、解放の神学の苦境が論じられるいま、そしてなによりも、目をおおほどの貧富の格差と生存の危機が南の世界の民衆に集中して苦しみを押し付け続けている

るこの時代こそ、あの民衆の存在を確認することが重要なのではないだろうか。なぜなら、解放の神学は、根源的にはこれらの人々の心身にこそ生きて存在しうからである。

ブラジルにおける解放の神学の優れた第一世代の一人、聖書学者カルロス・メステレスの言葉に次の一節があったことを思い出す。彼は、同時代の貧しい人々の解放をめざして生きてがゆえに殺され、キリスト教的復活信仰の言説とともに後の人々に伝承されたイエスの軌跡を叙述した最後に、彼自身の宗教的確信を吐露してこう語っている。

「イエスは湖畔でわたしたちを待ち続けています。希望があります。落胆の理由は存在しません。」

(『時流に逆らうイエスとともに』から)

わたしは、この力強いメディテーションの言葉の「わたしたち」とは誰だろうかと考えることがある。そしていま、このフィールドワークの旅を通じて、その「わたしたち」という声をいささかでも聴いたといえるのではないかと思っている。この旅で出会ったブラジルの貧しい民衆の歌と踊りと祈りの奥深い背後で、人々の心臓の脈打つ鼓動のようにその声は絶えず響いていたのだと思えてならない。

【注】

注1) 原著は1987年に *Liberation Theology: The Essential Facts about the Revolutionary Movement in Latin America and Beyond* として刊行された。

注2) 後藤政子訳『解放の神学とラテンアメリカ』(同文館) p.81.

注3) 同書 p.83

注4) 高橋均は歴史学者の立場から1980年代の解放の神学を取り巻く南米社会の動向を「大きな転換期」としてエヴァンジェリカル諸教会との競合的時関係を指摘している(「対峙する解放の神学とエヴァンジェリズム」、蓮實重彦・山内昌之編『文明の衝突か、共存か』東京大学出版会、2000年)。

注5) 山田陸男によれば、「ブラジル南東部の大都市や近郊に見られる不良住宅で、木、トタン板などで造られ、しばしば数百から数千の集落を形成している」(『ラテン・アメリカを知る事典』平凡社、1994年)と説明される。今回の実見では電気・水道が施設されて比較的環境が整備されつつある集落から、公共アクセスが皆無の谷底の湿地の集落まで見られた。

注6) Ernesto Cardenal: *El evangelio en Solentiname* (『ソレンチナーメの福音書』)として1978年にスペイン語版の刊行が始まった分冊シリーズが、後に各国語に訳され広く注目された。1982年に最初の日本語版も刊行された。

注7) 解放の神学の社会的実践の基本的方向は、しばしば「貧しい人々の優先的選択」という簡潔なフレーズで表現される。これは1968年にコロンビア・メデジンにおける第二回ラテンアメリカ・カトリック司教会議が採択した「メデジン文書」第4章9項による有名な一節である。

注8) グスタボ・グティエレス『解放の地平をめざして－民衆の霊性の旅－』（新教出版社、1985年）p.10。

注9) グスタボ・グティエレス『解放の神学』（岩波書店、2000年）p.7。

注10) 同書 p.15。

注11) アルバート・ノーラン『キリスト教以前のイエス』（新世社、1996年）、p.67,pp.174-178。

参考文献（本文中の引用以外）

G・アンドラーデ/中牧弘允『ラテンアメリカ 宗教と社会』新評論、1994年。

宇都宮輝夫「人生物話としてのスピリチュアリティ－現代の医療現場で」湯浅泰雄・監修『スピリチュアリティの現在－宗教・倫理・心理の観点』人文書院、2003年。

岩井健作・渡辺英俊「草の根の＜解放の神学＞を訪ねる－ブラジル体験の旅から」『福音と世界』2005年1月号。

中尾貢三子「解放の神学と聖書解釈－コスタリカでのリブラ（LIBLA）ミーティングに参加して」『福音と世界』2006年2月号。

Leonardo Boff, *Espiritualidade: Um caminho de transformacao*, Editora Sextante, Rio de Janeiro, 2001.